様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：４１４０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４２４４

研究課題名（和文）認知症高齢者のBPSDを軽減する熟練介護職員のケアのプロセス

研究課題名（英文）Process of care by experienced care workers to reduce behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) in elderly dementia patients

研究代表者
松橋　朋子（MATSUHASHI, TOMOKO）

日本赤十字秋田短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：３０４６１７１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、認知症高齢者グループホーム（以下、GH）入居後でBPSDが顕著である認知症高齢者と関係を形成しながらBPSDを軽減していく熟練介護福祉士の介護実践のプロセスを明らかにした研究である。研究方法は、熟練介護福祉士のケア場面の観察及び個別面接調査を行い、対象理解と判断・実践（対応）を分析した。さらに、熟練介護福祉士のキャリアの特徴、BPSDの軽減に向けたケアの認識及びかかわりについて質問紙調査を行い、その特徴を分析した。これらの結果から、熟練介護福祉士のBPSDが軽減するまでの認知症高齢者のケアの特性について明らかにし、GH適応困難時の認知症高齢者のケアの提言を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　認知症高齢者のケアにおいてはエビデンスに基づいたかかわりが求められ、ケアのプロセスを知りそのかかわりの結果として引き起こされる入居者への影響について理解できる力が必要とされる。質の高い認知症ケアを実践している熟練介護職員はどのようにケアを判断し、一連のケアがどのようなキャリア形成と関連しているのかを明らかにすることは重要な意義がある。
　以上より、これまでほとんど研究が行われていないGHの熟練介護職員のBPSDの軽減に向けたケアの根拠、キャリアの特徴、ケアの認識及びかかわりについて明らかにすることで、より実践に即した教育を行うための提案を行った。

研究成果の概要（英文）：This study characterizes the process of care practice provided by experienced care workers to reduce the behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) and build relationships with elderly dementia patients with marked BPSD who are living in a group home (GH) for the elderly with dementia. The method involved observing and personally interviewing experienced care workers on-site to analyze their understanding and decisions/practices (actions). They were also given a questionnaire to gauge their career characteristics, awareness about care to reduce BPSD, and involvement in characterizing these aspects.
Based on the results, we identified the characteristics of the care provided by experienced care workers to reduce BPSD in elderly people with dementia, and proposed a care model for those who have difficulty in adapting to GHs.

研究分野：社会科学

キーワード：認知症高齢者グループホーム　熟練介護福祉士　BPSD　ケアのプロセス　キャリア形成

１.研究開始当初の背景

BPSD（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia）は介護職員のかかわりによる影響が大きく、そのケアのプロセスは介護職員自身の価値観や経験等による認識に基づくものであることから、自身のケアを振り返り、ケア内容やその判断の根拠について分析することが重要である。

BPSD を改善するための支援方法については、様々な報告があるが、認知症高齢者グループホーム（以下、GH）入居初期から BPSD が軽減するまでのプロセスについて、介護職員の対象理解やケアの根拠に焦点をあてた研究は少ない。また、認知症高齢者の入居後の適応プロセスについては、入居経験の有無が影響していることが指摘されているが（鈴木, 2014）、本研究の施設は新設の GH であり、入居経験が無い認知症高齢者を調査対象とすることから、入居経験の有無や入居期間の影響を受けない条件を設定することが可能である。一方、介護職員のキャリア形成については、特養の介護職員を対象とした研究があるが、GH において質の高いケアを実践している熟練介護職員とはどのような人を指すのか、これについての研究の蓄積は見られない。

これらから、本研究は、次の 2 つの課題認識に基づく研究として位置づけた。

1 つ目は、GH の熟練介護職員のケア場面において、BPSD を軽減するに至った実践内容を具体的に記述することで、ケアの根拠を把握することを意図する。具体的には、GH 入居後初期の認知症高齢者に対して熟練介護職員は、どのように対象を捉えてケアを行っているのかというプロセスを分析し記述することで「GH の認知症高齢者のケアの特性」についての基礎資料を得ることができると考えた。

2 つ目は、専門的な認知症ケアを行う GH の熟練介護職員とはどのような経験を積んできているのかという視点に基づき、これらの熟練介護職員は、BPSD の軽減に向けたケアについてどのような認識をもちながらかかわっているのかを明らかにする。

上記の課題を明確にすることで、より実践に即した認知症高齢者のケアに関する教育を行うための基礎資料を得ることができると考えた。

２.研究の目的

本研究は、筆者のこれまでの研究成果の発展を意図する認知症ケアに関する継続研究である。GH 入居後の認知症高齢者に対する熟練介護職員のケアの実態を把握し、GH におけるケアの質の向上を図るための基礎資料を得ることを目的とする。具体的には、次の 2 点である。①GH 入居後で BPSD が顕著である時期の認知症高齢者と関係を形成しながら BPSD を軽減していく熟練介護職員の介護実践の根拠を明らかにする。②GH 熟練介護職員のキャリアの特徴、BPSD の軽減に向けたケアの認識及びかかわりについて明らかにする。

用語の定義

- 熟練介護福祉士：経験年数が 5 年以上の介護福祉士で、施設の管理者が良いケアを実践していると判断し推薦された者とした。
- BPSD の軽減：適応（馴染み）の判断基準（久米・高山・西山、2010）を用いた。熟練介護福祉士と研究者で日々のケア記録を確認しすべての項目に該当した場合に BPSD が軽減したと判断した。
- ケアの認識：熟練介護福祉士が BPSD 軽減のために重要であり必要と感じているケア内容。
- キャリア：目標に向かって職業経験を積み重ね、職業全体を通して自らの能力向上を目指す自己実現の過程。

３.研究の方法

GH 入居後初期の認知症高齢者と関係を形成し BPSD を軽減していく介護実践のプロセスを明らかにするために、

（1）GH の熟練介護職員を対象に観察及び個別面接調査を行い、対象理解と判断・実践（対応）を質的に分析した。調査対象は、A 県内の新設の GH である B 施設（2 ユニット）の熟練介護福祉士 5 名で、ケアの対象となる入居者は、入居前から BPSD の症状がある 3 名とした。調査期間は平成 28 年 8 月 13 日～10 月 30 日（平成 28 年 7 月 1 日開設）である。調査方法は、①非参与観察法：熟練介護福祉士のケア場面について、原則週 1 回の頻度で観察し、研究者が不在時の様子は熟練介護福祉士から情報収集した。熟練介護福祉士と入居者の言動については「どこで」「誰と」「何をしていたのか」について記入することを基本とし、フィールドノートへ記録した。時間帯は入居者の情報を得、BPSD の症状が出現しやすい時間帯とし 2～3 時間程度であった。②半構造化面接法：観察終了後、熟練介護福祉士と研究者で、BPSD を軽減するケアと考えたところについて両者が一致した場面をプロセスレコードに書き出し、ケアに至った内容及びその判断の根拠についてインタビューを行った。面接は一人あたり 30 分程度であった。

（2）GH の熟練介護職員のキャリアの特徴、BPSD の軽減に向けたケアの認識及びかかわりについて質問紙調査を行い、量的な側面から分析した。調査期間は平成 29 年 8 月～9 月で、調査対象は各都道府県の介護サービス指定情報公表センターで公表されている GH のうち、経験年数 5 年以上の介護職員の割合が 90%以上である 288 箇所の GH に勤務する熟練介護福祉士各施設 3 名（計 864 名）である。調査内容は、熟練介護福祉士の BPSD 軽減に向けたケアの認識、経験年数や教育背景等キャリア形成に係る要因とした。BPSD 軽減に向けたケアの認識については、松橋，鈴木（2018）の調査結果より抽出されたカテゴリを基に 16 の質問項目を設定した。「実践の程度」と「必要性の認識」の 2 つについて回答を求め、評定尺度は、「実践の程度：十分ではない、必要性の認識：重要ではない」を 1 点、「実践の程度：十分である、必要性の認識：とても重要である」を 4 点とする 4 段階で、得点が高いほど実践の程度及び必要性の認識が高いことを示す。

倫理的配慮として、調査の依頼に際して書面にて調査の主旨、協力は自由意思であること、匿名性の保持、得られたデータは本研究の目的以外には流用しないことを明示した。

４.研究成果

（1）の研究成果

入居者の言動・状況及び介護者のケア内容としては、実際に行われている行為や配慮について、ケアの判断の根拠については、援助過程で起こっていることや入居者とのかかかわりにおける感情や認識を記述した。次に、熟練介護福祉士の認識を表していると考える部分を一要素として抽出しラベル付け（サブカテゴリ）を行い、サブカテゴリの内容が類似するものをグループ化した。BPSD に対する熟練介護福祉士の判断・実践（対応）として、21 のカテゴリ、45 のサブカテゴリが抽出された。

熟練介護福祉士は入居者の BPSD を軽減するにあたり、【生活の継続性を重視する】というケアの目標に向け、【共感の姿勢をとる】、【本人の思いを推測し傾聴する】ことを意識しながら【納得を得る】、【得意なことに働きかける】、【関心を引き出す働きかけを行う】対応をしていた。入居者とのかかわりや得意・関心分野を引き出す際には【楽しい気持ちを継続できるようにかかわる】視点は欠かせず、【共感の姿勢をとる】、【本人の思いを推測し傾聴する】、【日常の行動パターンを把握する】と併せて介護を行う上での基本的な態度・姿勢であることが示唆された。さらにケアの実践にあたっては、【不安の軽減を確認する】とともに、【回りの状況を判断する】、【他入居者へ配慮する】等を根底に捉え支

援していた（図1）。

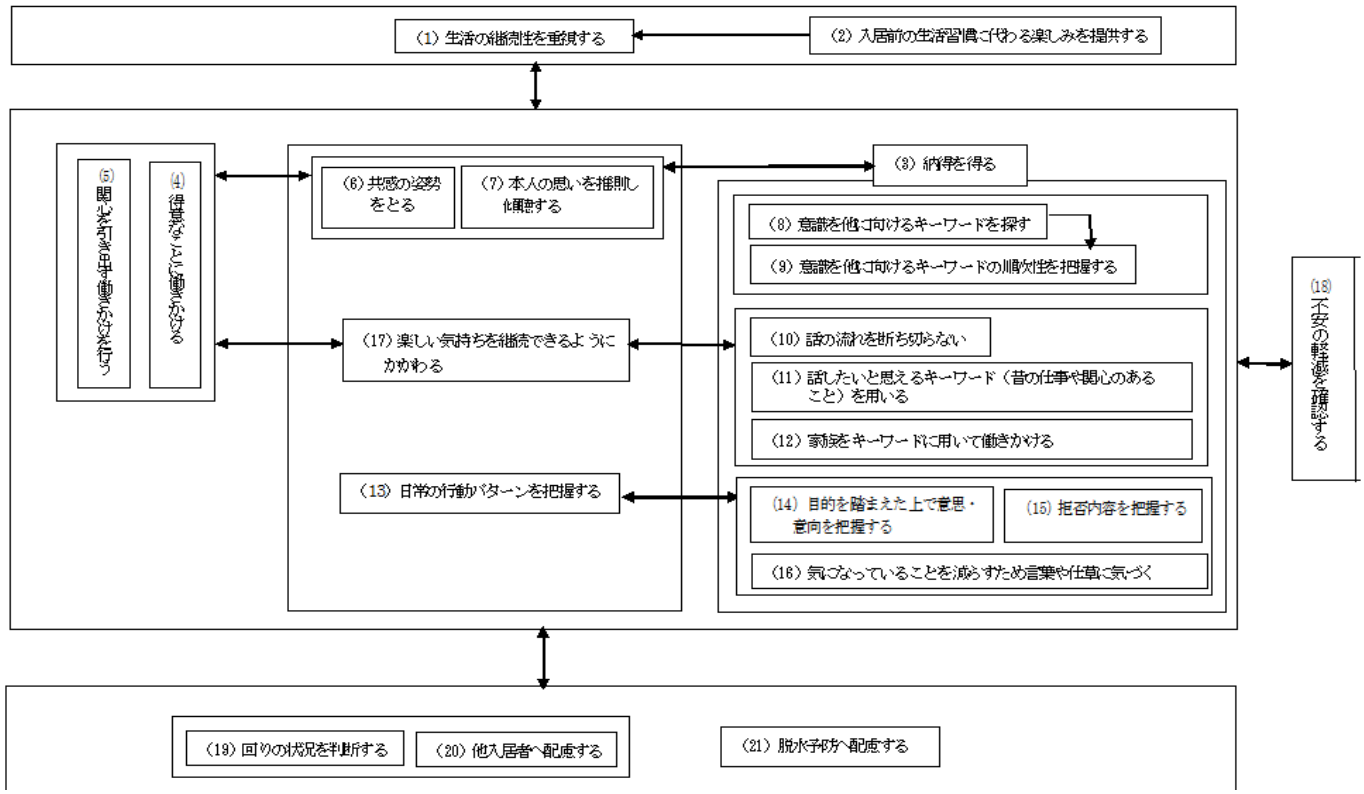

図１　認知症高齢者のBPSDを軽減する熟練介護福祉士の判断・実践（対応）におけるカテゴリの相互関係

（2）の研究成果

有効回答数は164名（回収率19.0%）であった。対象者の基本情報については、男性23名（14.0%）、女性140名（85.4%）であり、50歳以上60歳未満が64名（39.0%）と最も多かった。介護職としての従事期間の平均は、19.1±9.3年、認知症ケアに従事した期間の平均は、12.1±5.4年であった。これまで勤務した施設・事業所種別は、GHが80名（54.8%）、特別養護老人ホームが53名（36.3%）、介護老人保健施設が29名（19.9%）の順であった。介護福祉士の資格取方法については、「実務3年の後、介護福祉士国家試験に合格」と回答した人が127名（77.4%）と最も多く、次いで「介護福祉士養成施設（2年課程）卒業」20名（12.2%）の順であった。キャリアアップ形成に際して、最も影響を受けた研修会・勉強会は「認知症介護実践者研修で」あり、経験10年以上経過後の受講者が多かった。キャリア形成に影響した人は、上司、同僚の順に多かった。認知症ケアの実践の程度に関する評価項目では、まあまあ十分である水準の評定3.0以上が16項目中9項目であり、認知症ケアの必要性の認識については、すべての項目でまあまあ重要である水準の評定3.0以上を示した。本研究の熟練介護福祉士は、「入居者の意思・意向を把握している」、「入居者の脱水予防に配慮している」、「入居者の日常の行動パターンを把握している」、「入居者のプライドを傷つけないよう配慮している」については実践が十分であり、重要であると認識している傾向にあった（表2）。

表２　熟練介護福祉士の認知症ケアの各評価項目平均値

	評価項目	①実践			②必要性		
		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
1	入居者の納得を得ている	159	2.83	0.67	161	3.68	0.64
2	入居者の意思・意向を把握している	160	2.98	0.60	161	3.69	0.63
3	入居者の言動の背景を理解している	157	2.92	0.60	158	3.67	0.68
4	入居者の思いを推測し，共感・傾聴の姿勢で接している	28	3.18	0.61	29	3.62	0.82
5	入居者が話したいと思えるキーワード（昔の仕事，興味・関心，家族）を用いてプラスの感情に働きかけている	162	3.07	0.67	160	3.61	0.68
6	入居者との会話では，話の流れを断ち切らないようにしている	162	2.98	0.67	160	3.49	0.75
7	入居者の生活の継続性を尊重し居室を整備している	163	2.93	0.76	160	3.49	0.68
8	入居前の生活習慣に代わる楽しみを提供している	162	2.57	0.77	162	3.56	0.66
9	入居者の得意なことや関心を引き出すようにしている	161	2.88	0.68	161	3.63	0.64
10	入居者が楽しい気持ちを継続できるようにしている	163	2.90	0.73	160	3.64	0.66
11	入居者の脱水予防に配慮している	162	3.50	0.63	161	3.79	0.63
12	入居者の日常の行動パターンを把握している	163	3.32	0.64	161	3.75	0.61
13	入居者のプライドを傷つけないよう配慮している	163	3.24	0.66	160	3.78	0.63
14	他入居者へ危険が及ばないよう配慮している	163	3.34	0.62	160	3.75	0.69
15	入居者へのかかわりの結果がどうであったか（不安が解消されたかなど）確認している	162	2.94	0.71	162	3.66	0.64
16	チームの一員として介護職，関係職種と連携しケアを行っている	162	3.11	0.68	162	3.76	0.64

＜引用文献＞
①鈴木聖子、熟練介護職員のキャリア形成からみた認知症ケアに関する研究、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、2011-2013 年度
②久米真代、高山成子、西山みどり、認知症高齢者の入所後の適応プロセス―居室開放型施設での適応行動の観察から―、神戸市看護大学紀要、14，2014、11-20
③松橋朋子、鈴木聖子、認知症高齢者の行動・心理症状（BPSD）を軽減するグループホーム熟練介護福祉士のケアの根拠、日本ヒューマンヘルスケア学会誌、3（2）、2018、35-45

５.主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①松橋朋子、鈴木聖子、認知症高齢者グループホーム熟練介護福祉士の BPSD の軽減に向けたケアの認識、日本ヒューマンヘルスケア学会誌、査読有、4（2）、2019

②松橋朋子、鈴木聖子、認知症高齢者の行動・心理症状（BPSD）を軽減するグループホーム熟練介護福

祉士のケアの根拠、日本ヒューマンヘルスケア学会誌、査読有、3（2)、2018、35-45

〔学会発表〕（計 2 件）
①松橋朋子、鈴木聖子、認知症高齢者グループホーム熟練介護福祉士の BPSD の軽減に向けたケアの認識、第 26 回日本介護福祉学会大会、桃山学院大学（大阪府)、2018 年 9 月
②松橋朋子、認知症高齢者の BPSD を軽減する熟練介護職員のケアのプロセスの構造、第 23 回日本介護福祉教育学会、金城大学（石川県)、2017 年 2 月

６.研究組織
（1）研究代表者
松橋朋子（MATSUHASHI　TOMOKO）
日本赤十字秋田短期大学・その他部局等・講師
研究者番号：30461718
（2）研究分担者
鈴木聖子（SUZUKI　SEIKO）
日本赤十字秋田看護大学・看護学部看護学科・教授
研究者番号：40305272